



地球のいのちの営みと調和、融合して
共に生き合うコミュニティづくりの情報を発信する

いのちの森通信



公益財団法人
いのちの森
文化財団



Vol. 29
2014. Jan

平成26年1月1日発行
編集 山下 薫

発行/ 公益財団法人いのちの森文化財団 〒380-0888長野市大字上ヶ屋2471番地2198 TEL.026-239-0010 FAX 026-239-0011
ホームページ http://inochinomori.or.jp Eメール zaidan@inochinomori.or.jp

キミはいよいよジリ貧だ!

さて、特別研究生という恵まれた地位から、転、博士課程不合格、大学追放、それに続く3年半はどん底でした。修士修了即失業!すると、愛の権化とも言うべき目白町教会の木間誠先生は、私のために駆け回って、M学院大学のご友人のH教授を口説いてくださり、夜間部の論理学の週、コマの講義の代講をさせて頂くことになりました。25歳で、とにかくにも大学の教壇です。学生は全員年上の方ばかりでしたが、牛懸命講義すると喜んでくださいました。しかし博士課程をせめて満期退学でもしていいと専任講師になれないと3年目になって知って、どうしたらいいかと、クリスチャンと聞いた東大の助教に相談に行きました。すると聞かれました。「それで、キミ研究の方はどれくらい進んだか?」

連載 『ほんとうの自分』とは? どん底から立ちあがる! ～秘められたいのちの素晴らしさ～

第五回

馬場 俊彦
(名城大学名誉教授)



「キミはいよいよジリ貧だ、早いところ方向転換を考えたらどうだ、つまり学究として身を立てることを諦めて、どこか拾ってくれる所を探そう」と「どこか会社でも?」「そうか!」「...貴重なお時間をありがたうございました」

「皆さんの中にヒョットとしてご自分のことを(つまらない存在、居ても居なくてもいい存在)と思ってしまう方が居られますか、もし居られたらそれは大変な間違いです、それはご自分の眼で自分を眺めなさい、そして思っているよりも大きな眼、宇宙くらい大きな眼、いや宇宙をお造りになった神様の眼からご覧になると、あなたはなめてはならない大切な方です、なぜかという、神様は、人も無駄な人をお造りでない、どの人にもどの人にもその人でなくては果たせない大切な方用

ある夜の絶叫

高校の先生の口を探しましたが、どこもダメでした。M学院非常勤と家庭教師四軒を続けながら、胃潰瘍がひどくなり入院。退院後、ある夜、家庭教師から帰ってドイツ語の哲学の本を読み始めたら、眼が活字の上を滑るばかりで意味がとれません。「僕、学問もダメなんだ」とどうも泣きだしました。「僕は人生の道を踏み誤った、頭が悪いのに哲学なんか来てる、もう取り返しがつかない」と思い、愛用のナイフを手に取りました。焦っていたのか、手首の動脈が分りませぬ。頸動脈は?と探り始めた時、父と母の顔が浮かびました。「いかに!貧しい中から大学にやってくれた両親の血が、無駄に地面に吸い込まれてしまふ!絶対いかに!」同時に石版の奥から小さい声で「ここぞ!死んでたまるか!」という声がありました。「そうか!」それで、生きるに生きられず、死ぬに死ぬに、どうしたらいいのだ?...その時、フト、今はじき本間先生のある日曜日の講話の一節が浮かんできました。

自分も神様の作品だ!!

1時間以上続けてくたくたになったとき、またフト思いつきました。「神様が造ったって?...そんなら、この自分も神様の作品だ、それを「つまらん」というのは失礼だ。僕は自分を「君」と

比べていたのだ。彼は100点、頭も優秀で出版社の息子で恵まれた条件で育った。僕は30点、焼酎屋の倅で頭も悪い。でも両方とも神様が造ったのなら、責任は神様にある。もし「君」がその100を60しか活かしてないなら、怠慢ということになる。僕は30点でもその30点以上でできんくらい活かしまくった。満点だ!文句あるか!」と思ったらその途端、文句なし!!と大声で怒鳴られたみたいで心に響きました。「どうだ!文句あったまるか!やりやあいいんだろ、やりやあ!!」どこから湧いてきたか、すごい元気が出て来ました。

翌日、八歳年上の友人が僕を見て「何が起ったんだ、キミ、えらい元気がぞー!」「いや、別に...」それまでは「どうだい?と聞かれて「まあ、ナントカ!」と蚊の泣くような声でしか答えられなかった私が、別人のように元気な大声だったのです。

ある外人の家を久しぶりに訪ねると「ミスター・ババ何が起ったんですか、ホワットハブドントウユー?」と言われます。「なぜそんなことを言うんですか?」「ユアフットステップス足取り!」と足もとを指して言われます。実際私自身自分に何が起ったか、まだよく分りません。とにかく毎日嬉しく不思議な変化が起ります。内側にも不思議な変化が起ると、外側にも大変化が始まりました。次つぎと新しい出会いが起り、ジリ貧だと言われた私に驚くほどの新しい人生の展開です。その実際は、次回以降に譲るとして、ここでまずハッキリしたのは、人間は表面がどんなに哀れに落ちぶれていても、その奥底には計り知れないいのちの力を秘めている。地球に例えて言うならば表面は固く冷えた殻に閉ざされているが、その奥底には熱いマグマが際見えあれば吹き出ようと煮え沸いているということ(心の構造は地球に似ている。図2)。

「死と向き合った時、父母に済まぬという思いと同時に、「ここで死んでたまら

ばばとしひこ 1932年岐阜県に生まれる。1951年東京大学文科一類入学。出世競争に驚き文学部哲学科に転進。修士修了するも博士課程不合格。前途に絶望。ある夜自殺寸前から立ち上がり、以後不思議な人生の展開を経験。1966年名城大学就職、理工学部で英語・哲学担当。同大学大学院総合学術研究科・経営学研究科、また愛知医科大学看護学部で人間学を講義。現在名城大学名誉教授。

「死と向き合った時、父母に済まぬという思いと同時に、「ここで死んでたまら

「死と向き合った時、父母に済まぬという思いと同時に、「ここで死んでたまら



図2

70歳から90歳までが脳が最も聡明になる？

年を取るごとに一年過ぎるのが早いと言われているが、「実感！」といった昨今である。気が付いたら、そう先がない年齢に達してしま...

さてこの定年なるものは通説によれば定年制を敷いたころの平均寿命が55歳であったから55歳にしたとのこと。現在は65歳が一定年になりつつあるが、平均寿命という観点からいえば80歳が定年ということになるのではないかと...

新しい年を迎えて

～いのちの根源に迫る学びを深める～

塩澤 研一

(いのちの森文化財団 副代表理事)



そのものが、愛と誠と調和をもって進化発展するものであるとの認識がある。本来私たちは大いなる一つの中に存在する...

最近、日本航空を見事に再生させた稲盛和夫氏などを見て、そう思わずにはいられない。もちろん体力的な衰えは若下なりともあるだろうが、日本航空再生に向けた...

さて、本財団に於いては大きな3つの教育文化事業を行っているが、本年は鹿兒島大学稲盛アカデミーの奥健一郎先生をお招きして...



奥健一郎先生を交えたプレ勉強会の様子。講義の奥の深さにみんな感動でした。

湿原の復活や外来種の除去なども計画

また自然環境問題については破壊がすすんでいる湿原の復活や外来種の除去などを含めた事業を計画している。長野県は国内に於いても有数の優れた自然環境の宝庫...

さらに戸隠の西には静岡―糸魚川フォッサマグナ(大きな割れ目)が走っており、西日本と東日本を二分する。伊豆諸島が日本列島にぶつかり大きく、一つに割れたことを物語っており、日本列島は緩やかなV字形をなしている。このフォッサマグナの線上には高上・戸隠という霊線があり、宗教・文化の宝庫でもある。

時代とはリーダーの意識に大きく左右される。昨年は伊勢神宮の式年遷宮が20年ぶりに行われ、この資料は長野県の本宮地方のヒノキによって賄われた。交通運搬手段が現在と比べれば極めて困難な時代にあつて、これらの文化や技術が日本全上に広く広がっていったことを考えると人間が作ってきた歴史とはまさしくその時代のリーダーの意識のありように大きく左右されることを物語っている。

「いのちの根源」から発する祈りにも似た希望

こうしたアジアや日本の文化は、遠くはアングロ文明にまで大きな影響を与えていたと言われている。さらに最近では遺伝子による文明の解明が進んでいるが、人類の大本はアフリカに生まれた一人の女性であることが判明しているという。

馬場真光氏が提唱する「貨幣のいらぬ共同社会」とは、まさしく「いのちの根源」から発する祈りにも似た希望なのだと思う。本年は、このいのちの根源に迫る学びを深めてまいりたい。どうか、大勢の方々のご参加を願っています。

2014年 いのちの大学講座 (学長 帯津良一・副学長 巽信夫) ～人生をよりよく生きる～ (日程は変更になることがあります)

- 「がん患者のための合宿養生塾」 講師 帯津良一先生 (帯津三敬病院名誉院長) 2014年 3月28日(金)～4月2日(水) 5月4日(日)～9日(金) 8月22日(金)～27日(木) 11月22日(金)～27日(木)

- 「脳と心の勉強会」～脳と心と体のつながりについて学ぶ～ 講師 久間 祥多先生 (脳神経外科医) 2014年 5月10日(土)～11日(日) 2014年 10月4日(土)～5日(日)

- 4月 山下 宗洋先生 (茶道裏千家準教授) 5月 内田 明子先生 (子供の森幼児教室) 6月 馬場 忠寛先生 (芸術家・ギャラリー棟)

※詳細はお問い合わせ下さい いのちの森文化財団事務局 TEL 026-239-0010

あの日は、朝から雪が降った。とてもきれいな雪だったけれど、津波の被害を受けた人たちは寒くてたいへんなことだろう、なにか私にできることはないかしら、そんなことを思ったのよ。まさか自分が避難民になるなんて考えてもいなかったから。

麻里さんはいつも、雪の話をする。空を仰いで雪を顔に受け止めたのよ、って。

彼女は福島県飯館村の森の中に住んでいた。現在は福島市の郊外の占い借家に避難している。飯館の森に住んでいた頃は、鶏を養い、川んぼを耕し、ハーブを育てていた。手づくりのジャムや、パン、野菜で食卓は豊かだった。

震災の4年前に連れ合いが、がんで亡くなった。5年に満たない短い結婚生活だった。森には一人の思い出がたくさん生きている。若い頃から精神的な不安定を抱えてきた彼女にとって、森は安住の地、この世で唯一、生きることが出来る場所だった。

彼女はその雪を眺め、灰色の空から落ちてくる結晶体を、きれいだなああと身体で受け止めたのだと、言う。

あることが、測定によって判明する。その線量は私が彼女の森の家を訪れた一年の10月で、およそ30マイクロシーベルト毎時であった。

部屋の中でも、3マイクロシーベルト毎時あった。私が持っていたガイガーカウンターは0.3マイクロシーベルト毎時で警報が鳴るように設定されているため、車中からずっと鳴りっぱなしになり、私たちは苦笑して電源を切った。

そんな線量の高い場所に、毎日のように通い続けている麻里さんを、友人は、心配したのだ。そして、彼女と話をしてくれないか、と相談された。

チェルノブイリ事故の汚染地帯にも行ったことがある。原子力にも詳しい山口さんなら、彼女になにかしらの助言を与えることができるのではないか、と友人は言うのである。

正直なところ、私は自信がなかった。確かにベラルーシの村を訪れてホームステイをしたことがある。原子力の問題にも1年以上関わっている。だが、私は部外者である。被害も受けず安全な場所に立っている私に、今まさに、自分の身体の一部であった森を奪われようとしている彼女の気持ちがわかるはずもない。

それでも、彼女とメールの交換を始めたのは、現実には放射線の汚染のまっただ中にいる彼女に、純粋に興味をもったからだった。作家のやじ馬根性にはかならない。私は、放射性物質が怖くないんです。だって、森はちっとも変わっていない。家の裏のわき水に棲む山椒魚も生きています。虫も生きている。鳥も生きている。植物も恐れて逃げているのは人間だけだから。



《特別寄稿》 福島・魂の表現者たち

田口ランディ (作家)



お金が貰えるなら迷惑料はいただきます。だけど、怒ろうという気にならない。

この森が愛おしいと、彼女は言います。いきものは、けなげだ。いきものは季節を忘れない。この森で、山や鳥や植物と共に生きてい……と。

彼女に、どんな言葉を差し出したらいいのかさっぱりわからなかった。彼女が、人間以外の生命も自分の仲間として感じることが出来る。人間と他の生き物を分けていない。だから、彼女の言葉が普通の感覚の人たちにはうまく理解できない。そのことで麻里さんは傷ついていた。

だが、ある時を境にして訴訟団から降りてしまおう。そして、一人の人間としてチツソ木社の前で座りこみを始める。闘うためではなく、人間同士の対話をするために。のちに「チツソは私であった」(窪田房)という書名の本を出版し、水俣病運動の精神的なリーダーとして、今日に至る。

上野ほど前に、水俣でお会いして以来、細いおつきあいが続いていた。私は緒方さんに手紙を書いた。福島の現状、そして、いま、いのちの繋がりを生きたいとして麻里さんに、言葉を出し出すことが出来るのは緒方さんだけかもしれない。だから、麻里さんに会ってくださいますか……と。

緒方さんの身体に蓄積している有機水銀は、神経を害し続けており、緒方さんの体調は決して良くはなかったのだが、緒方さんは私の手紙を受け取ったその日に、電話をくれた。

「自分になにができるかわからないが、お会いしましょう」

公益財団法人いのちの森文化財団では
以下の公益目的事業への寄付金を募集しています

- ①「高齢者のための生きがい創造基金 (死を想い、より良い生を生きる・生と死の統合事業) への寄付」
- ②「青少年の社会復帰と自立のための育成活動への寄付」
- ③「東日本大震災被災地の子供たちの教育を支援する活動 (保育園へのお野菜支援含む)」
- ④「いのちの森の会費 (一般寄付)」

※本財団は特定公益増進法人です。本財団への寄付は税制上の優遇措置が適用され、所得税・法人税などの控除が受けられます。(詳細はお問合せ下さい)

【ご支援の方法】

- ▼郵便振替用紙にてお振込みの場合は、振替用紙に寄付先①～④をご記入の上、お振込み願います。
- ▼銀行振込み・電信振込みの場合は、財団事務局までホームページ・メール・FAX・電話(1ページ目参照)にて寄付先①～④をご連絡の上、お振込みをお願いいたします。

【お振込み先】

- ゆうちょ銀行振替口座 00520-3-42181
- 八十二銀行 本店営業部 普通 1093531
- みずほ銀行 長野支店 普通 1991794

いずれも名義は「公益財団法人いのちの森文化財団」

「私は、反原発の人たちが、ここが汚染されたと言っているのが、辛くてたまらないんです。私のような者がいると、まるで放射線が危険じゃないみたいで誤解されると、非難されます。だけど、私はここから離れることができません。人間だけ逃げるといことができません。人間だけだ。」

いま、この国に「人ではないもの」として、語る事が出来る者が人間だけだ。

麻里さんは、そつと涙をぬぐった。

「私には絶対に出ない言葉だと思った。私からは絶対に出ない言葉だと思った。私からは絶対に出ない言葉だと思った。」

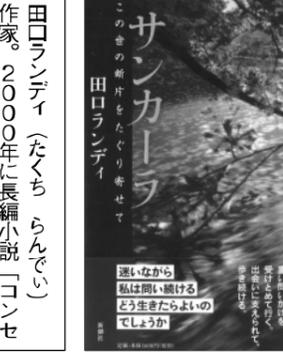
「あなたは、この森に、好かれたいからですか……」

「じぶんは、今日、魚たちの代理としてここに来ました」

「表現って言ったって、いろいろある。喧嘩も表現だ。文章書くのも表現だ。なんでもいい、とにかく自分を表現し続けること、それが生きるということだと思おう」

その日、水俣展の講演で、緒方さんは壇上に立ち第1声、こう語った。

田口ランディ(たくち らんでい)作家。2000年に長編小説「コンセン」でデビュー。以来、人間の心や家族問題、社会事件を題材にした作品を執筆している。小説以外にも、ノンフィクションや旅行記、対談など多彩な著述活動を展開。2010年より対話のできる世代の育成のため「ダイアログ研究会(明治大学にて)」を開催、多くの参加者を得ている。最新作「フジ」にて(文藝春秋社)「ヒロシマナガサキ、フクシマ」(ちくまプリマ)新書



田口ランディさん著書のご紹介

が何人いるだろうか。その声を、その言葉を、わたしは理解出来るだろうか。私も、人ではないものたちを表現出来るだろうか。福島にわたしが問われたことは、表現の根幹にかかわる問題だ。生きるということの本質にかかわる問題だ。

「よそ者」が「身内」になると…

私達は日頃、自分以外の人間を「身内」と「よそ者」というふうに分けて認識しがちですが、それまで敵のように見えていた「よそ者」が何らかの事情で「身内」になると、その人に対する受け止め方が全く変わってしまうことがあります。私自身、小学校時代のクラス替えや勤め先の他社との合併の時など、組織の組み換えに際して度々このような現象に直面し、相手の中身が変わりがないのにその人に対する受け止め方が変わってしまうのは一体なぜだろう？ といった不思議に思ってきました

意識の中の境界線

アメリカの現代思想家ケン・ウィルバーは、『白著 無境界』において、世界には「境界」というものは本来存在しないにもかかわらず、人間は赤ん坊から大人になる過程で自己と他者の境界線を意識の中でつぎつぎと狭めていき、それによって他者との緊張関係を増やしていく、と主張しています。このような意識上の線引きは自我の確立プロセスとして重要なのですが、同時に人間を苦しめる源泉ともなり、人間は、白他の境界が幻想にすぎないことに気づくことによって、はじめて全体性を取り戻し平安を得ることができると彼は説きます。

本来境界は存在しない、ということとは、あらゆるものが一体であるということですが、「いのち」は一つ、人類はみな家族」などとよくいいますが、次のような事実を照らせば、これが単なるキャッチフレーズでないことがわかります。

①ビッグバン理論によれば、宇宙は原初の大爆発によって生じ、そこからすべての物質や生物が分かれてきたとされます。これは、すべての生命は元をたどれば一つであることを示しています。

②生物学的にも、ミトコンドリアDNAの解析によって、約十二万年から二十万年前に存在したアフリカの一人女性(ミトコンドリア・イブ)が人類全体の共通祖先であるということが判明しています。

③人間はふつう自分のことを皮膚に囲まれた身体に取まった人格だと思っ

④そもそも原子は私達がイメージするような粒ではなく、細かく分解していくと最終的には波動になるといわれています。この世界の真の姿が多くの波動が響きあっているものだとすれば、そこにはいかなる境界を見つけないことも不可能です

脳科学の発見

こうした事実から、私達が通常信じている白他の境界というものはあくまで意識が作り出したものであることがわかります。この点に

最近脳科学の分野でも興味深い報告がなされています。サンドラ・ブレイクスリー他著『脳の中の身体地図』によれば、人間の脳には身体の各部位に反応する神経細胞がそれぞれかたまって存在しており、それをもとに脳の「ボディマップ」を描くことができるのですが、この「ボディマップ」には、自己の身体外にある様々な存在(たとえばスポーツ選手としてのラケットや競技場全体、コートを走るチームメイトなど)までもが自在にマッピングされるといわれています。つまり、脳には自己以外の存在をあたかも自己の一部であるかのように感じ取る能力が備わっているのです。また、白じという認識自体、

脳に入力される様々な情報が適切に統合されてはじめて生じうるものであり、「白じ」という存在は本来錯覚にすぎないといわれています。

社会問題の深層

「境界」とは錯覚であり、すべての存在は本来一つのいのちであるという理解が一般に広がると、社会にどのようなことが起きるのでしょうか。その場合、様々な社会問題に思いもよらない解決の道がみえてくる可能性があります。



貨幣も要らない いのちの一体性に 基づく共同社会

馬場真光
(ヴェリタス総合研究所)

例として、昨今懸念されている格差拡大の問題を取り上げてみましょう。世の中にはなぜ貧富の格差が存在し、さらには拡大していくのか？ こうした問題はふつう本人の努力の問題だとか、制度に不備があるといった観点から議論されますが、深層にはやはり人間の境界意識が横たわっていると考えられます。すなわち、現代社会では、自分と他者を隔てる境界意識があまりにも強固であるため、「自分の物」を他人に分け与えるということが自然には行われにくくなっています。こうした状況は、常識的には当たり前のように思えるでしょうが、その「常識」は、実は先に述べたような分離の錯覚によって支えられているのです。

生命的な物流原理とは

では、いのちの一体性が常識になり、物資が自然に流通する社会というものを考えることはできるでしょうか。



そのような「社会」のミニチュア版は人体です。人体内の臓器はお互いに自我を主張し、栄養分を独占したりすることはありません。生命の法則にしたがい血液循環を通して必要な養分が必要となるように流れることで、人体はつつがなく活動することができています。

いのちの一体性が実現している社会のもう一つの例は家族です。家庭の中では概ね必要な物が山にやり取りされます。特別な事情がある場合を除き、家庭内の日常の物のやり取りに代償が要求されるという話は聞きません。

それでは、社会経済全体がこうしたいのちの一体の原理にしたがって運営されることはありえるのでしょうか？ それは社会のメンバーの意識次第です。無償で他人に物を分け与え続けるのは、自分の生存が危うくなるなどの心配が生じるかもしれません。生命の原理に従えば、一時的に不足が生じて、別のところから必要なものが補われるのです。そのためにも必要な条件は、不足に関する情報が共有されること、そして物資を輸送する手段が存在することだけです。現在の宅配サービスの隆盛にみられるように、社会にそうした仕組みを作ることは技術的に難しいことではありません。

社会に経済的安定をもたらすには人道支援のような緊急措置とともに制度自体の改革が必要ですが、より根本的には、社会が、一つのいのちであるとの認識にもとづく流動的な物流原理(これを仮に「生命的な物流原理」と呼ぶことにします)が確立されることが最も重要だと思われ

貨幣の要らない共同社会

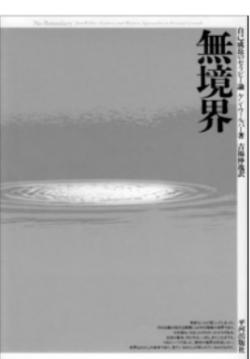
興味深いことに、生命的な物流原理が支配する共同社会では、貨幣というもののさえない必要になる可能性が高いです。

貨幣のもつ機能には、①価値交換機能(物々交換では成立しにくい取引を貨幣が媒介となって実現させる)、②価値尺度機能(物の持つ価値を数量的に示して物と物との交換比率を決める)、③価値保存機能(物のままでは滅失してしまう価値を、将来の交換取引に使えるよう保存する)の二つがあるとされています。

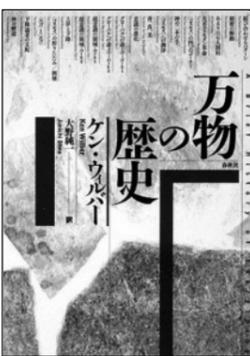
これらの二つの機能はいずれも(等価)交換という行為を前提としたものであるため、貨幣とは(等価)交換が取引の前提となっている社会において役立つ道具である、ということがわかります。

ところが、いのちの一体性が実感され、生命的な物流原理が浸透した社会では、等価交換そのものが行われません。そのため、貨幣の二つの機能がすべて無意味となります。実際、私が以前訪れた「アズワンコミュニティ鈴鹿」(三重県鈴鹿市)という生活共同体では、過去、独自の地域通貨をつくって流通させていた時期がありました。世帯間の家族的意識が深まるにつれて、取引のつど金額を記録するのが「だんだん面倒になり」、今ではその通貨は廃止され、様々な農産物が自発的に提供され、持ち帰られる商店が登場しています。いのちの一体性が浸透した社会で貨幣が不要となる証左でしょう。

貨幣の要らない共同社会とは、反文明的な社会でしょうか？ 自然に近い場所で無農薬の野菜を育て、人と物を分け合いながら安心した共同生活を送る。そんな社会のイメージを原始生活への退歩であるとする人もあるかもしれませんが、しかし、便利な技術をあえて排除する必要はない。技術の進歩がもたらす影響を理解しつつ適切な選択を行っていくべきではない



参考図書「無境界」ケン・ウィルバー 著



参考図書「万物の歴史」ケン・ウィルバー 著



「すべてのいのちのちが一つ」という新しい常識のもと、人々が技術の恩恵を受けつつお互いに貢献しあい、物資が自然に流通する社会。それを実現するための一番の鍵は、私たち人間が過去何万年もの間育んできた強固な「境界意識」を少しでも弱め、すべてのいのちが一つであることの実感を深めていくことにあると思われ

馬場真光(ぼばしんこう) 1962年生まれ。上智大学外国語学部卒。学生時代より人間心理と政治経済の双方に関心を持ち、日系、外資系の金融機関で実務経験を積んだのち2011年に退職。ヴェリタス総合研究所を創設。現代の物質主義的な人間観・自然観から脱した新しい政治・経済のあり方をテーマに研究活動中。経営学修士(金融論専攻)、米国ノースウエスタン大学、学術博士(人間学専攻、名城大学)。主要論文・訳書「経済学の基礎としての人間性の理解について」(ウィルバー哲学の見地から)「2005年中野哲堂先生年報第37号」、ローマ教皇庁教理省「正生命のはじまりに関する教書」(共訳、1987年カトリック中央協議会)

馬場真光氏には、引き続き、強固な「境界意識」を少しでも弱め、すべてのいのちが一つであることの実感を深めていくためにはどうしたらよいか？ ということについて、深めていただく予定です。(編集部)